

仏葬習俗の庶民儀礼考

和田 謙 寿

一
仏葬の習俗の中には民間習俗的な風俗が混入し、仏教的に割り切れぬ多くの習俗要素が含まれている。これらの習俗は印度・中国を経てわが国に伝えられたものもあれば、中国的なものが直接經由して構成されたもの、または、わが国古来のよりの地域的信仰文化が中心となつてつくり出されてきた場合のものもある。かかる問題を全面的に扱う事は紙面の都合上不可能なので、葬送習俗の一片をとつて考察していくことにしたい。

二
死者の顔面上に白布を覆うしきたりは日本をはじめとして、各国に行われている習俗であり、人情的に然らしむるところである。しかし、三角布、または布帽といつて白い紗らしを（白紙の場合もある。）三角形に切り、鉢巻姿の前面部に当

てる習俗は、その由来を外国に求むる事は殆んど不可能なことで、日本独自の事のように思われる。私の知る範囲では、この風俗はそう古い時代のものではなく、AD、一六五三年、道忠著による小叢林清規在家送亡の「布帽に卍字を書き、亡者の額に抹てる。」と述べられているが、これに遡る幾何かの時代であろうと思われる。三角布の起源由来説話については、後述する如く、この推定年代よりもやや遡るかも知れぬが、死者個人的なものとしての考え方によると、種々なる疑問点が生ずるのである。元来、三角布は死者のみのものでなく、葬送に参加する周囲の人々、つまり、棺担ぎや位牌持ち、更には善の綱を引く大衆の者までが用いられてきたのであり、その名称も、紙鳥帽子・シツポウ・ツノ帽子・ヒタヒアテなどと呼ばれ、広く庶民的なものとなつている事から考え合わせて、葬送儀礼に端を発し、一般大衆に行われていた三角布の習俗が、やがて故人の場合のみの習俗と転化し、現在にまで至つたものなのかも知れない。東北地方をはじめと

した、北陸・山陰などの日本の各地で、葬列の中にかみしもをつけ、綿帽子や烏帽子の如きものをかぶり参加するところもある故、三角布は葬列に参加する古風俗としての烏帽子の名残りなのかも知れない。特に、現在でも棺担ぎの者が額に三角布を付けて葬列に参加する習俗は、割に多く残されている。三角布を他方、「ミカクシ」と、呼んでいる地方もあり、江戸時代後期から明治にかけて葬列に参加する人々の多くが、皆付けているところも存していたのである。かつての三宅島における「イミ」の如く、婦人たちの左の袖をかぶつて葬列に参加する習俗、つまり、両者共、太陽の光を白布によつて避けるという意の転化したものであつた。それにしても、太陽の光を避けるためのものならば、必ずしも三角形にする必要はないはずである。三角形に何故せねばならぬかというところに、特別の理由が存するわけである。先述した卍は仏教徒としての印であり、葬列の旗や龕などにしばしば見受けられるところであるが、必ずしも死者と結びつけて考えべきものではなかつた。長期にわたり死者の額に付けられた三角布に卍が印されていたために、現在でも三角布を指し、別名、「マンジ」と呼ばれるところが存したのであつた。四角の布や紙をわざわざ切り折りしてまでも三角形にし、額に付ける。何故にこうせねばならなかつたのか、江戸時代以降の幽霊画や芝居などには、決まつて三角布を額に付け足を消し

た白装束をなしている。現在では昔日に比して葬送者の三角布を付ける風俗は減り、棺担ぎの者か近親講師組者が、地方によつてはかかる習俗さえもなくなり、死者個人のみとなつている場合が多い。おそらく葬儀儀礼としての役割よりも個人本位のものとして移行したのかも知れない。日本民俗学第二十二号、「三角形の呪力について」において堀田吉雄氏は、古来より三角形を忌む風習が昔日より各地にあつた事を掲げて、三角畑や三角田、三角屋敷などのもとに、長野や奈良、広島などの郡部において、嫌われた事実が詳細に述べられている。特にその中でも、「三角畑や三角田が忌まれた理由として往古、かような土地が田の神の祭場として使用せられていたことによるものであろう。」と、強調せられている点が注目せられる。一般的にみて古来、三角形の持つイメージは色々であるも、あるものは生命力を持つデルタとしての存在性をもち、またあるものは山岳崇拜としての存在性など、昔から三角形にはある種の呪力が宿つていることは確かなことであつた。河川の終着地点としてのデルタ(三角洲)は、農作物増産の根源的な役割を保持し、また、人間性(女性)としてのデルタは生命の根源、母体としての重要な役割を所持せるものとして考えられていた。山岳性としての存在は、コニーデ型としての富士山などの山々を代表とすをが、大地を基盤として三角形に天を突きさすが如き威厳さこそ、われわ

れの先祖には偉大なる靈山的存在として感じられたのであろう。民俗学者の間で指摘されているように、われわれの生活と三角形との関連性は色々などころに見受けられる。「頭陀袋と三角形」「仏前に盛りられる食物が心臓を象とつて三角形になされている」。「葬送時におさめられるオムスビも、わざわざ三角形につくる地方もあるという」。また、施餓鬼会に当り菩提寺に届ける新盆の米袋も三角形をなしているところをみると、三角形と葬送、死霊との間には、古来より何らかの關係のあつた事がうなずかれる。

三

葬送行事の習俗をつぶさに観察すると、その中には故人を慕い蘇生を願うしきたりと、故人に対して恐怖感を所持する。つまり、死魔嫌悪の行事とが、あざなえる繩の如く交互に現わされる。特に後者の感情は前者の場合に比して顯著に現われた場合が多い。もつとも、両者に含まれると思われる場合のものも存在するが、死魔嫌悪を思わしむるものとしては、庭葬礼としての仮門の習俗をはじめとして、葬列、埋葬儀礼の中に種々含まれている。仮門の習俗に関しては古来より種々なる解釈がなされているが、窮極の目的は仮門の名称の示すが如く、竹や茅の如きものをもつて門状に折りまげ、出棺途上に当りその中をくぐり通つて、寺院や墓地へと

送られるのである。仮門を通過するや直ちにこれをこわし、二度と帰宅出来ぬようにした。斯くすることによつて死霊の再来を防ぐ呪法としたのである。中国においては出棺と共に、親族や友人の者たちが街路にて紙銭に火をつけた。その際、棺担ぎの人足たちは大声をあげながら、棺台を背負い、棺台の乗せてあつた棺台を足げりにするなどの乱暴が加えられた。この別れの儀式を起材頭と呼ばれるが、出棺時に茶碗を割るといふ習俗と共に、死霊の帰来することを防ぐ共通的な手段として考えられた。葬列の進行中にも時折若干の紙銭を燃やしつつ歩かれるが、周辺にいる悪鬼を避けて無事目的地に至るべく、種々の心遣いがなされる一方、家への再来を忌み遠のけているのである。日本においても棺を白布や縄で必要以上にぎりぎり巻きつけたり、(現在は形式化されている)。出棺の場合玄関を避け縁側や勝手口からわざわざ出したりするのも、中国的な感情と類似した流れがうかがわれる。

中国人と日本人との風土と歴史性の相違により多少感情的な相違はあるも、日本で行われている葬送習俗の多くが、中国古来の葬送のしきたりと大いに関連性のある事を考える時、今後の研究に心せねばならない。子供の葬式には目上たる父は墓まで送ることをせぬのが通例であつたし、また、妻の死に際しても、夫は墓まで送ることを多くの場合しなかつた。中国宗教制度第一巻、(清水金二郎・荻野目博道翻訳—大雅堂)

中には、「生前夫が妻に従つた事はなく、妻は必ず夫に従つて来たのであつて、この關係は死後においても變化してはならぬ。」と紹介されているが、沖繩でも親より早く死んだ子供たちは一般の墓地には埋葬されず、子供の墓地として墓地の一隅に収められている例もあり、この思情は日本における葬送習俗の中にも多分に影響せしめられてきた。元來、大人の葬式と子供の葬式と區別せられている例は至つて多く、民間信仰的な立場とは別に仏教の教理面からも説かれていた場合もあつた。大人の葬送習俗における死靈嫌惡・邪魔嫌惡の思想に比して子供の場合には、儒教的色彩はあるにせよ、先立つた子供への不愍な死に対する感情はあとまでも残り、呪力的な面が簡略化される傾向にあつた。大人の葬送儀礼の場合にはあらゆる面で死靈の再来を防ぐ行事が行われたが、山頭の三匝や葬送行列の往復路などにしばしば認められた。一概に三匝といえどもその形式には種々の相違があるといわれているが、その典故の歴史は至つて古く、大般槃經・涅槃經・遊行經などに印されている。印度より中国を経て日本に行われた行事の中でも、一番葬送習俗として普遍したのもと思われる。わが国では死家の庭前で行われた場合と寺院の境内で行われた場合、墓前で行われた場合の三者がある。三匝の方法も死者を中心としてその周囲を廻る場合と、死者を含めて三度廻る場合の二者がある。いずれの場合も原

則として左廻りとせられているが、地域の信仰的慣習や地形などによつて、その習俗にも多少の相違がある。印度においては三匝の習俗、または七匝の場合もあつたといわれているが、その起源は日本において従來考えられてきた死靈を迷わせるためばかりのものではなく、印度においては儀規に叶つたところの儀礼でもあつた。葬列の中には無事に死者を浄土の地へ送らしむるように仕向ける習俗があると思えば、他方では再度死靈としてこの世の中に現われぬように仕向けられた習俗もあつた。同時にまた、偉大なる葬列を自負せんとした習俗中、その地方特有の習俗がこれに加味されて醸し出されたところのものもあつた。地方により葬式の別名を、ジャンボン・ジャランボンなどと呼ぶところもあり、これは葬列の中に鼓鉦の法具が僧侶によつて用いられ、その樂器の音から連想された名称である。地方によつては在家の人たちがこの法具を持ち、自から打ちならすところもあり、この法具は葬列の望む道の辻々において打ちならされるのが通列であつた。一説には悪魔払いのためだともいわれるし、または、辻々の魔を鎮め同時に死靈の戻ること避けるためのものだともいわれている。現在ではむしろ斯くすることが盛大なる葬送儀礼として自負しているもののようにも感じられる。中国においても古來よりこのかた、葬列の樂士は欠かす事の出來ぬものであつた。華僑の存在するところ現在においてもこ

の習俗は残っており、「華僑の葬式がにぎやかである。」という基本もこの辺に見出すことができる。往古の中国においては、七―八名の樂士により編成され、長ラツパや太鼓・鑼・銅鑼などの樂器のもとに演奏された。服装も赤色や白色などを用いた帽子や服を着用し、ところにより暑い地方では上半身裸体でのぞむところもあつたといわれている。行列の先頭部（提燈のあと）に位置するのが常であるが、大きな葬儀の場合には行列の中間部に何組となく狭まれる場合もあつた。現在、華僑の葬列においても、樂隊（土）の役割は相当な比重を占めている。樂器も現代的な管樂器や胡弓、それに銅鑼・太鼓などを使用し、専門的というよりも、アルバイト的な樂士を雇っている場合が多い。樂士の雇用方法も、日本において縁者の葬家に花輪を贈るが如く、互に贈り交わる風習になつてゐる。葬式に樂器を用いられたことは、すでに釈尊の荼毘時にあるといわれているが、近代ヨーロッパにおいても葬送曲の名のもとに、音楽は重要な意義を有してゐたし、カトリック教団における讚美歌も同様なことが云いえる。中国における葬列の音楽は不協和的な騒がしい印象こそ受けるが、最近のものは徐々に主旨に沿そらうものとなつた。

四

往古、中国においては葬送儀礼の重要な役割の一つとし

て号泣の習俗があつた。かかる習俗は、わが国においても古來行われたところであり、一升泣き、二升泣き、などという言葉の中によく知らされてゐる。泣人の名稱についても日本各地に残されてゐるが、トムラヒババ・ナキテ・ナキバアサンなどの名は顯著なものである。主に産婆や女子の人たちの間になかば副業的に行われたところもあつたといわれている。何人でも肉親との別れに際して泣き悲しむのは当然なこととて、洋の東西を問わぬところである。にもかかわらず感情面が礼記による啼哭の制の如く、葬送儀礼にまでもくみ入れられるようになったのは何故であろうか。中国古來のしきたりは必ずしも死後直ちに埋葬するとは限らず、身分の如何により数年後に葬送を行われた場合もあり得たのである。子供や近親者の殆んどの方が故人に情意を催さない年限をすぎても、泣き声は大声をはりあげて号泣したのであつた。そこには儀礼的と見られるものが存在したのであつた。礼記をはじめとして古來の文献の中には、足踏みの儀礼や哭踊の語を掲げ、これこそ死者の蘇生を祈る招魂の意を持つものとして説明し、葬送に望む泣人の風習に通ずるものであるとしている。ときには哭は死をおそれ祓禳せんとするものであるといわれているが、葬式の際、経文や呪文の普及しなかつた古代においては号泣こそ、死者の霊を弔い、その安穩を祈る最大なる儀礼行為であつたのである。